



ビットバレーの風景

みんなみんな昔ながらの彼であって、
その日その日の風の工合いで少しばかり色あいが変わって見えるだけのことだ。

おい。見給え。青扇の御散歩である。あの紙凧のあがっている空地だ。
横縞のどてらを着て、ゆっくりゆっくり歩いている。

なぜ、君はそうとめどもなく笑うのだ。

そうかい。似ているというのか。

――よし。それなら君に聞こうよ。空を見あげたり肩をゆすったりうなだれたり木の葉をちぎり
りったりしながらのろのろさまよい歩いているあの男と、それから、ここにいる僕と、ちがっ
たところが、一点でも、あるか。

太宰治「彼は昔の彼ならず」

シャイロックがいた風景

ITバブル盛んなりし頃の渋谷。

海千山千の投資家と、それこそ海のものとも山のものともわからないビジネスモデルを引っさ
げて億万長者を夢見る若者たちで会場はあふれていた。

ユダヤ人シャイロックもまた米国の著名ベンチャーファンド代表として若い企業の投資プレゼ

ンを聞くため渋谷にやってきた。めぼしい企業があればノウハウの乏しい日本のベンチャーに資金を投入しつつ、自分のシナリオで上場させ、莫大なキャピタルゲインを狙おうという目論見を胸に抱いて。

一方のビターバレーに集う若者たち。彼らは成功の聖地としてシリコンバレーを範とし、成り上がった自分の王宮として六本木ヒルズを夢見た。

シャイロックはベンチャー企業のプレゼンに先立って大物ゲストとして基調講演を行った。みなひとり残らず夢見る視線でシャイロックのプレゼンにいちいち大きく頷いた。まるでその頷き方が大きければ自分のプランがシャイロックにみとめてもらえると思っているかのようだった。

若者たちはシャイロックの基調講演を聞いた後、代表企業が数社プレゼンをし、その後カクテルパーティーで談笑してる。

シャイロックが移動する度に若きCEOたちはシャイロックと名刺交換しようと群がった。

しかしシャイロックは如才なく握手をこなしながらバンケットルームのある方向を目指していた。そして目的地まで人波をかき分けて移動すると、なにやら一人の青年に話しかけ、ほどなく群衆の中からその若者の脇をとり、パーティー会場の出口へ向かったのだ。

「さっきのビジネスプランは驚異的に素晴らしい！ついてはこれから、君とだけ秘密の商談がしたい」

嫉妬に満ちた会場のいくたの耳が、喧騒で聞こえるはずもないシャイロックのささやき声を確かに聞いたようだった。

シャイロック登場と堀木とユキコの再会

「私の名前はシャイロックだ。ヴェニス商人のシャイロックは私の先祖がモデルとなっているのだよ。だから人は私のことを現代のシャイロック、シャイロック2.0と呼んでいるんだ」

ベンチャーキャピタリストはそう自己紹介すると、さっそく仕事の話を持ち出した。

「なあ、君、君のそのプランは他社がやらないうちに早くやるべきだよ。君のような才能は株式公開で早く世にでないと社会的損失とさえ言えると私は考えるね」

シャイロック2.0は言葉巧みに青年を誘惑した。

しかし青年は実は心の奥底では、自分のこのプランは単なる思いつきに過ぎないありふれたアイデアであることは知っていた。

自分が世に出たいと思っている本当の理由も、自分の才能を開花させて世の中に何がしかの貢献をしたいという真の企業家精神なのではなく、物心ついたときにはいつも資金繰りに追われていて、落ち着きのない雰囲気はいつも漂う、酒を飲むと説教を始めるあのオヤジが仕切っている生家の町工場から一刻も早く名実ともに逃れたいという一心だった。

そのことを、自分自身でも普段は意識しないように心の奥にふたをしておいたのだった。

だから、このシャイロック2.0なるベンチャーキャピタリストが自分のことをそこまで評価するのはどこかおかしい、とは理性が度々告げていたのですが、人生のこの時期の青年によくあるように、青年はそれは自分の単なる自信のなさだと自分自身を都合よく言いくるめていたのだった。

「しかしシャイロック2.0さん。この事業を行うには少なくともスタートアップ時に5億円の資金が必要です。そんなお金は僕には・・・」

シャイロックは気にするなといった様子で笑いかけた。

「もちろん、社会的な地位も何も無い君がいきなりそんなお金を用意できるとは思っていないよ。君のお父さんの所有する工場の担保価値もたかが知れてるしな。君の下には手のかかる育ち盛

りの男の子が4人もいるし。まあ貧乏人の子沢山の町工場の親父に5億は無理だろ」

「え？うちの家族構成や父親の会社のことを調べたんですか？」

青年はシャイロック2.0に驚いて叫んだ。

「まあ、ね……。私の息のかかった者が場末の町工場の取引情報を銀行から引き出すことなど、たかだか半日もあれば……」

青年の耳に、自分がなんだか大きなとてつもない歯車のなかに巻き込まれていく音が少しだけ聞こえた。

「まあ私も資金調達のお手伝いが仕事だ。ただでという訳にはいかないさ。しかし銀行のようにうるさくあれこれ担保を調べたり、保証人を探せと行ったりなどはしない。そういうやり方をせずに、私は君の共同出資者となって、あんたが調達したい資金を一文の利子も付けずに、将来を共有するパートナー用立てようじゃないか」

将来を共有するパートナー。

堀木はこの言葉にたまらない魅力を感じた。

「具体的にはぼくはどうすればいいんですか？」

「うむ……」

「明日にでも投資銀行のところへ行って、新株予約権付き転換社債を発行することにしてくれればいい。それには念のためだが、契約書に記された通りの日時に株式が上場できそうもないと分かった場合には、その違約金の代わりとしてあんたの会社の資産をきっかり5億円分と、さらに手数料として2億円分、自分の会社の資産から好きなところから切り取って良いという修正条項をオプションとして加えていただきたい。もちろんこれは最終的にうまく行かなかった場合の話だよ。私だって共同出資者なんだから損はしたくない。全力を持って成功させるつもりだから、これはあまり気にしなくて良いかもしれないな」

「分かりました。それで5億円の資金が調達できるのですね」

「まあ、いちおうはそういうことになるな」

堀木は興奮を隠せない様子だった。

そこに特ダネをいち早くモノにしようと、会場の隅から二人の密談場所までやってきて、密かにこのやりとりを立ち聞きしていた一人の女性業界記者が驚きの声を挙げた。

「あ！あなたもしかして堀木くん！？」

「え？」

「ほら、中学校で一緒だった……」

「あ！ユキコちゃん……?!」

「ほう。君はあの時成田空港でわしに話しかけた業界記者だな。二人は知り合いなのか……」

シャイロック2.0は不気味にふふふと機嫌よく笑った。

「かわってないね。卒業写真のまんまだ」

堀木はシャイロック2.0の不気味な笑い声も耳に入らず、かつて恋心を抱いていた幼なじみのユキコと思いがけず再会して懐かしそうに微笑んだ。

シャイロックの誘惑

「堀木くん、ベンチャー企業の社長さんになったんだね」

ユキコは10年以上前の中学校の教室での堀木を思い出しながら言った。

「ああ、ベンチャーいうても資金も何もあらへんし、大嫌いなおやじの工場の事務所の一室借りてるだけだけどな」

堀木は卑下しながらも、代表取締役の肩抱きの入った名刺を自慢気にユキコに渡した。

「ソーシャルスマッシュ 代表取締役 堀木雄一郎 か。インターネットの会社だね」

「せや。ユキコちゃんのこれは、新聞社系のベンチャービジネスの雑誌だね。」

「うん。ただのライターだよ。その会社の社員じゃなくて契約社員なんだ」

「そっか。じゃあ、俺がビッグになったら取材して記事書いてよな」

「・・・うん。」

ユキコは曖昧に笑った。

「でもほんと驚いたわあ。堀木くんが急におらんようになってしもてみんな心配してたんよお。それにしても急な転校やったな～。夏休みあけたらもう家庭の事情で学校移らはったって、せんに聞いた時はほんまびっくりしたわ。」

「ああ。恥の一言なんやけどな、おやじが債務保証した会社が倒産して夜逃げしてしもてん。そんで連帯保証人のおやじのそこ、まあ、つまり自宅兼会社のうちんところに強面の借金とりのおっさんらが毎日押しかけてきよってな、俺もふくめて子供たちの身の安全が心配という段階になっしもうて、親戚の家頼って疎開しとったってわけや」

「そっか。辛いことたくさんあったんだよね」

「ああ、まあな。どや、おれやっぱ変わったか？」

ユキコは何か言おうとしてその言葉を飲み込んだ。

「いや、ううん。全然変わってへんよ。」

「ほんまか、そらうれしいわ。ユキコちゃんだって全然変わってへんで」

堀木は少し嘘をついていた。

大人の女性となっていたユキコに内心たじろいでいたのだった。

「ほんまにい？こんな仕事してるし、ずいぶんがさつになったんちゃうかなあなんて気にしててんで、ひそかに」

「うん、まあ、がさつなところはかえってかわってへん、というか」

「ああ！言ったな〜」

ユキコは堀木をこぶしで叩く真似をした。

「もしオレが変わったとすれば人生観かな」

堀木が大げさにユキコのパンチを避けるまねをしながら言った。

「どんな風に？」

「カネさ。金で買えないものはない。」

堀木は事もなげに言い捨てた。

ゆきこはその真意を測りかねて堀木の表情を伺ったが、何も見えては来なかった。

「お取り込み中わるいんやけど」

「へ？シャイロック2．0さん、大阪弁しゃべらはるんですか」

堀木とユキコが同時にシャイロック2．0を見て口をぽかんと開けた。

「あ！いや、見よう見まねでいま覚えただけです。コホン。ところで、君のお父さんがご友人の災難から会社を一時休業状態にしてその時に完成させたあの特許はスゴイですねー」

シャイロック2．0は急にデーブ・スペクターのような流暢にわざとらしい日本語を使い始めた。

「特許のことまで調べてるんですか」

「ええ。あの特許なんですが、お父さんの会社から君の会社に譲渡してもらったらどうかね」

「何を言うんですか？あれは機械部品の金型を作るときの特許で、確かにあの技術は人工衛星を打ち上げるときにも使えるとかで、特許自体はすごい価値があるらしいですけど、インターネットビジネスには何の関係もないし、それにオヤジが商売がヘタだから宝の持ち腐れで今なんの金も生んでないんですよ」

「そうらしいね。世界的な特許にもかかわらず町工場に眠っている特許。錬金術のカネの匂いがプンプンするねえ」

「シャイロック2．0さん、なにかよくないこと企んでませんか」

ユキコが横から口を挟んだ。

「おや、幼なじみの元彼女はいつからコンサルタント契約をしたのですか」

「コンサルタント契約なんてしてません、それに、彼女だなんてそんな事実は一度もありません！」

堀木は完全否定されてがっかりしたが、直ちに気を取りなおして代表取締役の威厳を持ってこう訊ねた。

「詳しくお話を聞きましょうか。シャイロック2.0さん」

「ええ。ではここではなんですから私のオフィスに」

「はい」

「元カノのコンサルタントさんも良かったらぜひ」

「元カノじゃない！」

ユキコはそう言いながらも行く気まんまんで大きく頷いたのだった。

スイートルームでの商談

「へえ、これはまたすごいところがオフィスなんですね」

堀木とユキコ、そして関西弁をしゃべる怪しいデーブ・スペクターシャイロック 2.0 の三人は、地下鉄銀座線虎ノ門駅の地上出口を抜けると、虎の門病院を左手に見つつ、たわいもない世間話をしながら徒歩で移動し、ホテルオークラの最上階のスイートルームにおさまった。

「うむ。日本では短期間集中して仕事をするからね、来日の時だけここのホテルのスイートルームが私のオフィスになるのです」

堀木は部屋をきょろきょろ見回しながら勝手に冷蔵庫を開けようとしてユキコに睨まれたり、完全におのぼりさん状態であった。

「さてと、リラックスしていきましょう。堀木社長はパーティーの続きだと思ってその開けようとした冷蔵庫の中から好きなアルコールを出して飲んでください。棚にあるお酒も全部セルフでどうぞ。ええと、元カノのコンサルタントユキコサンはお飲み物は・・・」

ユキコはだんだんシャイロック 2.0 の口ぶりにも慣れてきたので、ことさらモトカノを訂正することはなしにして話を合わせることにしていた。

「私はなにかソフトドリンクを」

「おやあ、それはそれは。じゃあ、わたしも最初はジンジャーエールで乾杯しましょう」

「ホラ！何やってんの堀木くん。お仕事の話し終わるまではお水で我慢しなさい！！！」

堀木はユキコがまじで不機嫌になりかけているので、あわてて手にしていた缶ビールを冷蔵庫に戻した。

「あなたの会社の大事な話でしょうが。ベンチャーだか何だか知らないけどちゃんとしなさい！」

ユキコはソファの隣に座った堀木のおしりをおもいっきりつねりあげた。

「はい！」

シャイロック2. 0はその様子を楽しそうに眺めているのであった。

「まず、先ほどのお話ですけど、親父の会社の特許を使うってどういうことですか？ぼくのインターネットビジネスに使い道ないと思いますけど。しいて言えば、ぼくのやりたいのは企業と企業の商談を成立させる支援サイトだから、特許を持っている地味だけど優秀な会社あります、みたいに親父の会社をクライアントにして月額5万円もらうとか、はあるかな」

シャイロック2. 0はビジネスの話になるとそれまでのへらへらした調子がすっと奥に引っ込んだ。

「堀木社長。あなたは非常な勘違いをされてます。そういった具体的で瑣末な実務的なことはあなたとあなたの会社の従業員がしっかりやればいいでしょう。私の仕事はあなたが調達したい5億円をスムーズに調達することそれだけですよ。」

「あ、はい。そうでしたね。すいません。でも、それでおやじの特許がいるのですか？」

「そう。はっきりいって君の会社にはまるで関係ない。しかし、私ならその特許を大々的に世界の知財市場に売り出すことができます。私が調査したところによるとその特許を餌にしたら5億などというカネはあっという間に集まります。君のソーシャルスマッシュという会社は、親父さんの会社の特許を管理している会社ということで、明日にでも法務局に行って定款を書き換えてもらいます。そしてその知財を管理している会社が副業としてインターネットビジネスも始めるというわけで、これも定款の付帯事項におまけとしてちょろっと書いておくことにします」

堀木は自分の自慢のビジネスプランがおまけといわれて顔が真っ赤になった。

横でユキコが心配そうな顔をして、堀木を眺める。

「おまけってどういうことでしょうか。ぼくは・・・」

「まあ、怒るのは無理も無いですな。しかし現実問題としてあなたの会社、あなたの信用、あなたのビジネスプランで5億円が集まると本気で思っているのですか？堀木社長？」

シャイロック2. 0はユダヤの金貸し本家本元シャイロックの子孫の面目躍如といった凄みのある表情で堀木に斬り込んできた。

「それは・・・」

堀木は横にいるユキコの前で恥をかかされたこともあり、怒りと屈辱で拳を握りしめていた。

「そらごらんなさい。あなたもうすうす、いや明白に自分にそんな魅力はない、自分が単なる裸の王様どころかこれから王様ゲームにエントリーしようとしている、いわば張り子の王様にすぎないことをよく知っているはずだ」

シャイロック2. 0は立ち上がると三人分のブランデーを用意して首を振るユキコの前にも有無を言わずそれを置いた。

「眠たいこと言っているガキに、おっとあなたのことですよ、私が5分間で資金調達の極意を教えてあげましょう。ただし、これは仲間にしか教えない。これを聞いたら完全にあなたも私の仲間だと私はみなすことにする。さあ、まずは仲間の印に軽く乾杯しましょう」

堀木とユキコはシャイロック2. 0の催眠術にかかったように、動けなかった。

やっと正気を取り戻しかけたユキコが、小さい声で「出ましょう」と堀木の袖を引いた。

堀木ははっとしたようにユキコを一瞬見つめたが、すぐにシャイロック2. 0に向き直ってこういったのだ。

「乾杯したらその秘訣を教えてください。仲間として」

「そう、仲間として」

「ちょっと、堀木くん何言ってるの。帰るわよ」

ユキコは今度ははっきりと声に出して堀木の腕を掴んで立ち上がった。

「うるさい！」

堀木は怖い表情をしてユキコの手を振り払った。

「教えてください。ぼく仲間になります」

「ほほう。見所があるね、君は」

「僕はどうしても今の現状から抜け出したいんです。今の自分は全部バイアウトしてまっさらの過去の何もない、あたらしい自分になりたいんだ！そのためだったらなんだってします！」

「ほほう。君は自分の人生と自分の過去をいわば私にM&Aで売却したいということだね。自分のあまり満足のいかない過去を、過去の記憶を、過去の思い出をすべて私に売り払い、そのかわりに全く別の、あたらしい人生、新しい自分という存在、人格をも手に入れようというわけだ」

シャイロック2. 0は過去の思い出をといて、いじわるくユキコと堀木を見比べた。

もしかすると、シャイロック2. 0は堀木がユキコに対して淡い恋心を抱いていたことをあの関西弁をしゃべった時にはとっくに見抜いていて、他ならぬそのユキコの前で、メフィストフェレスに魂を売却する自分自身の決意を語らせようとしたのかもしれない。

ユキコはそう思ってそっとシャイロック2. 0を見た。

するとシャイロック2. 0はその瞬間のユキコの心のなかを見透かしたように、紳士的にこやかに大きく頷いたのだった。

ユキコは恐ろしさでひざが震えそうになった。

「ねえ、堀木くん・・・」

「ユキコちゃん。気に入らないんならここでもう帰ってくれ。これは僕の問題なんだ」

「でも・・・」

「わっはっは。淡い恋心も黄金の前には無力だな。君はいいベンチャー企業を創り上げることができるかもしれないね」

ユキコはみじめな気持ちでいっぱいになった。あきらかにこの話の展開はおかしい。そして自

分は多分ダシに使われている。

そのことに堀木は気がついてくれない。

変わってしまったんだね・・・堀木くん。

ユキコは涙が浮かんでくるのを必死にこらえた。

「さよなら」

そう言おうとして堀木の眼を再び見ると、堀木もまた涙をこらえていた。ごめん、これはどうしても必要なことなんだ。

眼がそう言っていた。

幼子のような、でも抜き差しならない何かがあった。少なくとも人を騙して自分だけお金持ちになろうとしている金の亡者の眼ではなかった。

「サヨナラ」

ユキコが口にする前に堀木の口がそう動いた。

ユキコとの中学の思い出も何もかもまっさらにして、何かを必死につかもしているいる幼馴染のあの優しいの目がそこにあった。

中学の夏休み、夜逃げ同然で学校を去る時に、好きだったユキコにさよならを言うこともできずに、キセキのように再会してすぐにサヨナラを言わなければならない堀木の目はしかし、哀しく静かに堀木流ではあっても一人の男の目だった。

「私も乾杯させていただきます」

ユキコはグラスを手を取った。

堀木は驚いてユキコを見つめた。

シャイロック2.0は上べだけ驚いたふりをしながらも想定の範囲内のシナリオに満足して頷いた。

そしてそんな二人を見てユキコはあらためて思った。

堀木くんの眼は確かに私を必要としていた。

だから・・・

ううん。違うわ。

これできっと特ダネが取れる・・・。

ユキコは自分の心に言い訳をしながら笑顔でグラスを差し出した。

シャイロックの恐怖の投資哲学

「乾杯」

シャイロック2.0はこの上なく上機嫌で杯をあげた。

「それでは、君たちに資金調達の本意を教えよう。我が祖先、シェイクスピアのヴェニス商人のモデルにもなった本家本元シャイロックが一子相伝で伝えてきたものだ。私はくどいようだが仲間にしかそれを教えない。といっても怪しい仲間を想像してもらっては困るのだ。私の仲間にはホワイトハウスの財務担当者にもたくさんいるし、連邦準備制度理事会の今の理事長も前の理事長も長年の私の仲間だよ。」

シャイロックは一気に話し始めた。

「これがどういうことか分かるかい。日本で言ったら金融監督庁、財務省、日本銀行の全てがこの私の仲間だということになる。つまり財政政策も金融政策も私の手の中にあるのだ。君がもし経済学を知っているのならケインズもフリードマンも私の意のままだということだね。世界の経済政策はすべて私のシナリオ通りに動かせるのだ。そんな仲間にいま新しい日本の若者が加わったのだ。もう一度祝杯をあげようではないか」

堀木はこの演説を聞いて、有頂天になるかとおもいきや、青白い顔をしていた。どうやら自分の父親の特許を巻き込んで何か大事をしでかさないといけないことになる不安に加え、このデュー・スペクターばりの「怪しい日本語検定」一級のユダヤ人の言っていることがどうやらハッタリではないらしいとうことがその雰囲気から嫌というほど分かったらしい。

ユキコは・・・。

今はもうこの流れには逆らえない。そう思った。

堀木くんだけが頼りだ。

しかし横目で見えた堀木は蒼白な表情でただ頷いている。

「そして我々仲間の黄金のCanon、聖典はただひとつ！」

シャイロック2.0はまるでアドルフ・ヒトラーのように、数十万の大群衆に語りかけるがごとくに堀木とユキコに語りかけた。

「それは全世界の将来の富の前払いだ」

「これこそが資金調達の本意なのだ。例えば、君の父上の所有している特許とは独占権であり、その権利はもちろん過去の偉業として保有しているだけではなく、当然未来へ渡って行使することができる。その行使するということは能動的行使と受動的行使がある。特許は積極的に行使すれば未来の富を現在に引きずり下ろすことができるのだ。未来の富、そう人工衛星がこれから輝かしい人類の歴史において1000発打ち上げられるとしよう。それにそれぞれ100億円の特許収入が見込めるとする。分かるな、10兆円だ。10兆円の富を生むことを投資家に納得させ、君の新しくなったソーシャルスマッシュという会社がその権利を独占できることをも投資家が納

得すれば、彼らは安心して将来の富と同額までの出資を行うだろう。」

富を産め！
借金は将来清算しろ！

そうだ。

悪になれ！
愛を捨てろ！

現在の小さな悪は未来の大なる善のためにある
現在の裏切りは将来の友愛の証拠金だ

善はいくらでも市場から買い取れ！
愛は丸ごとTOBで買収しつくせ！

そうだ金で買えないものなどないのだ！！

「お考えは多分理解できました。では具体的にはどうするのですか」

堀木はすっかりシャイロック2.0の配下になってしまったかのようにだった。

「周辺特許というものを知っているね」

「はい」

堀木は催眠術にかかったように頷いた。

「君のお父さんの特許は実際にそれを実用化しようとする、敵対的企業がしかけた周辺部分の膨大な特許をクリアしないといけない。」

「わかります。たとえ完璧な精度の浄水器を作ったとしても、蛇口を捻って水を出す仕組みが特許でおさえられていたら浄水器は決して日の目を見ません」

「うむ。その通りだ。わしが見込んだだけのことはある。ここからが重要なところなのだが、実は私の米国での会社の一つにその周辺特許だけを調査、売買する会社があるのだ」

「といたしますと・・・」

「地上げだよ」

「は？」

「その土地単体では何の役にも立たない猫の額の土地でも周辺の土地を買い占めてワンセットにすれば、超近代的なハイテクビルも建てられるようになる。この時には土地の富はその土地の合成成分の数百倍か数千倍にもなることは分かるな」

「はい。日本でも土地バブルで地上げ屋がやっていたことですね」

「そう。私のその会社は全世界の特許の地上げ屋なのだ」

「それで・・・」

「そう。私は地上げ屋で君のお父さんの土地を売ってもらいに来たわけだよ」

「・・・」

堀木とユキコはこの瞬間、シャイロック2.0のビジネスモデルとその本当の来日の狙いがやっと分かったのだった。

空と君の間！

埋め尽くせ！

人の信用という錯覚で！

錯覚はいつしか真実そのものの虚偽となる

錯覚は本物以上の真実となるのだ！

人の真実とかいうまやかに騙されるのはもうやめろ

愛する人間をこれ以上傷つたままにするんじゃあない！

将来の富と現在の不幸の間を

誇り高き起業家精神をもって君が埋め尽くすのだ！

変わらないものってなんだろう～ホテルの夕焼け

「ねえ、堀木くん」

堀木は放心状態でソファに座っていた。

シャイロック2.0はというと、忙しく国際電話をしている。

デーブスペクターのような怪しく流暢な日本語ではなく、抑揚は抑え気味だがリズムカルでテンポの恐ろしく早い英語だ。

ボストンあたりの社交界の気取った紳士淑女か、もしくはウォール街の経済ヤクザが使うようなその英語は、堀木にもユキコにも完全には聞き取ることができず、それが二人の不安をいっそうつのらせていった。

「ねえ、堀木くん」

ユキコはたまらずに、今度は堀木の膝に手をやって揺すってみた。

「ああ、ごめん、何だい」

堀木は努めて作り笑いで答えようとしたが、顔は緊張でこわばっていた。

「今の話なんだけど」

「うん」

「お父さんがいいって言うこと前提になっちゃってるけど大丈夫なの？」

シャイロック2.0の特許地上げ計画は話としてはあり得ると思ったけど、あくまでも世界に通用する特許を保有している堀木の父親がその特許を使ったビジネスモデル、シャイロック2.0の思惑にイエスと言わなければ絵に描いた餅にすぎない。

「心配あらへん。おやじはな、実は俺には一切頭上がらへんのや」

「何でなん？あたしそれ聞いてもええのん」

「ああ、身内の恥やけどな。事実なんだからかめへんで。」

「う...ん」

堀木は父親が友人の連帯保証人となって借金取りに追われ、そこから逃れるために猛烈に無理な仕事をし、その中で母親に八つ当たりしたり、飲み屋のホステスに騙されて金を家から持ち出したり、母親がそれを苦に自殺未遂したことなどを淡々と語った。

「弟たちの面倒見ながら、おかんのその後のケアしたりとかな、全部俺がしてん。親父は現実から目を背けるようにして特許の開発に没頭して行きよった。特許より大事なものがあるの分かっててな」

ユキコは静かに頷いた。そんなことがやっぱりあったんだね。
第一印象で本当はユキコは、堀木の変貌ぶりに驚いたのだった。

あの天然の人懐っこさはそのままだったけど、万事に隙のない、こう言ってよければ人を基本的に信用しないことを信条としているような、世界との明確な距離感のある眼差しをしていた。

堀木はそんな目で転校してからの自分のことをユキコに話した。

空白の距離は埋まりもせず、かといって広がりもしなかったけど、さっき切羽詰まった目でサヨナラと言った時のあの懐かしい堀木は消えてなくなっていた。

人は変わる。でも変わらないものってなんだろう・・・

ユキコは寂しさをこらえながらそっとソファを立ち上がってホテルの窓から外を見た。

「堀木くとあたし？まさか...ね」

ホントは久しぶりなんかじゃなかったんだよ

思い出してたんだ、堀木くんのこと

つらい時はいつも

アスファルトに咲く花のよう...に？

いつかきっと見つけてくれると思ってた...

「明日はくるかな」

「え？いまなんかいうたか？」

ソファに座った堀木が窓際に体を向けて話しかけてきた。

「ううん。なんでもない。この話うまく行くかな」

「絶対うまく行くで。いかせて見せる。そしたら俺...ユキコちゃんのために...」

「え？何か言った？」

「いや...。別に」

ホテルの窓から見える夕焼けは、子供の頃見た絵本の一頁のように圧倒的に赤かった。

絵本と違うのは、そこにいるのが夕焼けをいっぱい背中に浴びて晩ご飯に帰る子供ではなくて、西日を煩そうに片手で遮りながらせわしなく足早にビルの谷間を抜けて行くビジネスマンであることだった。

夕日は変わらない。

夕日が映す風景だけが変わってゆくのだ。

「明日はお天気めっちゃええな」

堀木は何時の間にかユキコの真後ろに立って同じ目線で外を見ていた。

「明日はくるかな」

ユキコは今度は堀木に聞こえるようにはっきりそう言った。

堀木は何かを感じたようだった。

「あたり前やろ。俺にもユキコちゃんにも、あの頑張ってるビジネスマンにも、あの油断のならないシャイロックのヤローにもさ」

「シャイロックにも？」

「そうさ。へたすると俺たちは、あ、いや、ごめん、勝手に俺たちなんて。俺はあのおっさんのために地獄に落ちるかも知れん。とりあえずオヤジをはめなんとあかんようになるのは目に見えてきたしな。

でもまあ、朝になれば明日はくる。明けない夜はないで。」

堀木は電話中のシャイロック 2. 0の方を見た。

「シャイロックのヤローにもあいつの背負ったもんがあるんとかちがうか？それもごっついのが。せやなかったら有り余る金で孫と世界一周旅行でもしてりゃええのに、こんな切った張ったの世界で気合入れてなんややとる。あいつにはあいつのけじめつけなならん過去やら、せなあかん約束事があるはずや。俺にはなんとなくそんな気がすんねん。単なる金の亡者とは違う何か

がな。」

油断のならないシャイロックにそんなこと…。

ユキコははそう思ったが、ふと気がつくと、堀木はあの人懐っこい中学生の時の堀木の表情に戻っていた。

「ユキコちゃんはまあ、こう言っちゃなんやけど、マスコミ人として、世間の良識ある人の輦塵がいまくっとる、ITベンチャー企業とエンジェルだかハゲタカだかわからん投資家との狂乱の駆け引きを間近で見物して、そんでええ記事書いたらええんや。そんな風に不安で今にも泣きそうな顔なんかせんでもええやんか？」

優しいね。堀木くん…。

そっか。あたしそんな顔してたのか…。

でも、それは自分の心配じゃなんだよ。堀木くん。高みの見物みたいな他人事ムリだから…。

ずっとずっとあなたのことが…

「なんか無言でそんな女っぽい目で見つめられるとぞくっとくんなあ〜」

ユキコは電話に夢中のシャイロックの後ろ姿を一瞬見たあと、堀木にそっとからだを寄せた。

赤かった夕日がまばゆいオレンジ色となって、遠くから長くビルの谷間を抜けてホテルの窓に差し込んできた。

堀木の胸に寄せた顔をそっと横に向けると、窓と反対側のスイートルームの壁には、堀木がユキコの肩をそっとだいている姿が長い夕日の影絵となって浮かんでいた。

それはユキコが長い間夢見ていた堀木に寄り添う自分の姿に他ならなかったけれど、でもとても淡くて儚なげだった。

シルエットの中の堀木がためらうかのようにそっと揺れたあと、ユキコをキツく抱きしめた。

重なった影はその時ほんの少しだけ濃くなったように見えた。

特許のトレーディングビジネス

「いやあ、話はトントン拍子だよ」

シャイロック2.0はおよそ1時間ほども次から次へと電話をかけまくった後、ようやく堀木とユキコが座るソファまでやってきた。

陽は暮れてさっきまでのあの幸福な影絵は跡形もない。

一流ホテルのスイートルームで何億円もの商談の詰めが行われていく。

普通の会社のように従業員の働く姿もなく、もちろんデスクも並んでいない。社長室もなければ、小さな会社であれば社長室にありそうな実印やら有価証券の現物が保管された金庫もない。

しかしこの、まさに贅を尽くした仮の住まいで行われていることは、従業員や経営者や、金庫の中身といった会社の実態そのものをいかようにでも処分できる、権力行使の作戦立案そのものだった。

従業員をコントロールするマネジメントという、管理職の権力性すら微塵も感じさせない、もっと無機的でいわば権力の剥製のような社長室。それがこのホテルオークラのスイートルームに陣取ったシャイロック2.0の社長室だった。

「堀木社長の父上が所有する特許には、それ本体ではゴミみたいな、まあいわば堀木特許を邪魔するだけのクズ特許が46本も存在した。これはもしかすると君の父上把握していないことかもしれないが」

シャイロックはうっすらと小馬鹿にしたような笑いを口元にたたえながら堀木に語りかけた。

「それは・・・。そのとおりだと思います。たとえ知ったとしても大企業のように知的財産権の専門部隊があるわけでもないから、周辺特許を持っている会社と実用化にあたって交渉を進めていくなどのノウハウもない。第一そんな46本もあったら、1本ケリをつけるのに1ヶ月かかるとしても46ヶ月まるまる交渉に時間を裂かないといけない。それに足元を見て特許の使用料を

法外に設定する会社も多いでしょう。確かにあなたのおっしゃるように、特許は実用化にあたってはそうしたマネジメントの方が重要になってくると思います」

シャイロックは満足そうに頷いた。

「そうだね。その通り。ところで今私が小一時間のなかで何をしたか分かるかい」

シャイロック2.0は今度はユキコに話を向けた。

「業界記者としては興味深いだろう。私はね、いまその46本の特許のうち実に41本までの権利の所有者と間接的にコンタクトを取ったのだ。そして、交渉次第でその41本全ての特許がこちらの条件のままに使える内諾を取り付けた。もちろん米国の私の会社のエージェントが私の指示一つで直ちに交渉に移れるよう準備していたものを確認させたただけだがね」

「そ・・・そんなに簡単に行くものなのですか」

ユキコが何か言おうとする前に、堀木はにわかには信じられないといった表情で言った。

「うむ。驚くのは無理も無い。君は今個別に一つ一つの特許について相手先企業の担当者を捕まえて、この間の特許の地上げの件、地上げとは先方には言わないが、まあ特許使用の件交渉を進めたいのですがいかがですか、と我社の者が確認して回ったとイメージしてるね」

「ええ。あなたがそう言ったから」

「ははは。それはすまなかった。さっきのはものの例えだよ。株取引と同じなんだ。オプション条件をクリアしているかどうかパソコンで検索をかけると、その46本の特許のうちすぐにでも使用許諾が降りる特許銘柄がリストアップされるのさ」

ユキコはメモを取り出してシャイロック2.0に尋ねた。

「まさか、そのままパソコンで契約までができるとか・・・」

「ああ。それも株のオンライントレードと全く同じだ。特許条件を明示して注文を出しておけばどっと売り銘柄が向こうから押し寄せるよ。その仮契約までしておいたわけだ」

ユキコはもっといろいろなことを尋ねたかったが、にわかには言葉が出てこなかった。株の取引と同じようにリアルタイムで特許の権利の売買ができるシステム……。すでに稼働しているのか…。

「あの、そこにあるシャイロック2.0さんのノートパソコンでその取引サイトの現場をみることはできますか」

「おお！素晴らしい。話が早いね。私もそれを見てもらおうと思っていたところだよ。これからは堀木社長もデイトレーダーのようにこれとにらめっこしないといけない場面も多くなる」

「え？ぼくが直接その特許トレーディングをするのですか」

話の展開のスピードが早過ぎる……。

「当たり前だ。君が最終責任者だ。もちろん私の米国の会社のスタッフは自由に使ってかまわない。一日に数億円は動かしてもらうことになるだろう。」

堀木とユキコはお互いの不安を鎮め合うかのようにそっと顔をあわせて頷きあった。

「来たまえ」

シャイロック2.0はソファから立ち上がり、おそらく別途契約で運び込んだと思われる、自分専用のマホガニー製の重厚なアンティークの仕事用のデスクに向った。

そしてそこに積み上げてあった資料を乱暴に片付けると嬉々としてパソコンを広げ、不安を隠せない二人を手招きしたのだった。

「カラ売り、知ってるな」

「はい。自分で売りに出す株を持ってなくても、それを借りてきて売り注文を出す、自己資金の何倍もの取引ができる信用取引を使ったあれですね」

「そうだ。儲けるときは青天井に儲けられるし、地獄に墮ちるときには一気に破産だな」

「ええ。それも知ってます」

「手始めに堀木社長にはそのカラ売りをやって欲しい」

「え!？」

堀木とユキコは思わず叫び声を上げた。

「なに、そんなに怯えることはない。地獄に行かない方法はただひとつ。常にうまく売り抜けて天国に居続ければいいんだよ」

シャイロック2.0はにこやかに笑った。

「カラ売り...」

「おや、業界記者のユキコさんはまさかカラ売りをご存知ない？」

シャイロック2.0がわざとらしい大仰な身振りで言った。

もちろん知らぬわけではない。

知らないどころか、その負の側面について綿密な取材をして雑誌に売り込み、かなり評判になった特集を連載したこともある。

インターネットによって一気に一般大衆に拡大した株取引で、巨額の資金をパソコンのクリック一つでゲームのように動かすようになったサラリーマンや主婦が、空売りのギャンブル性にのめり込んで全財産をふいにしたり、自分の財産だけならまだしも会社に金に手を付けたり闇金融に手を出したりなど、カラ売りは最近マスコミでも取り上げられる気とが増えている。

「いえ、十分に知っているつもりです。」

「そうかね。しかしその表情ではカラ売りが単なる射幸心を刺激する、君たちの国の娯楽の王様パチンコの確率変動の大当たりのようなものだと思っているね」

その通りだった。

たくさんの取材をして感じたのは、機関投資家や株式相互持合いで企業の安定性を増加させようとしている会社の経営者層は別として、個人投資家で株の中身、つまり会社そのものの業績や将来性に関心をもつ人は稀ということだった。

デイトレードという言葉が示すように、基本的には短期、極端な話デイ、一日で損益を確定させる投資スタイルが一般的な個人投資家の株取引である。その投資スタイルで会社そのものの価

値を判断することは不可能だし、会社の将来性を真剣に考えることなど、かえって取引のタイミングを逃す邪魔なものでしかないというのも分かる話だった。彼らは例外なく派手な儲けにつながるカラ売り情報に敏感だ。

そしてユキコの考えでは、株価の下落を熱望するカラ売りは、シャイロック2.0のいう「将来の富の前払い」どころか他人の不幸を喜んで自分一人だけ大儲けするというタチの悪いギャンブルとしか思えなかったのだ。

「カラ売りは...シャイロックさんの「株式投資は全世界の富の前払い」を真似て言えば、あたしは「他人の不幸の前払い」だと思うんです」

ユキコは興味浮かそうに笑みを浮かべるシャイロックにそう言った。

通常の株取引は人間の経済活動の全てがそうであるように、安く買って高く売るものだ。500円で仕入れた品物を店頭で800円で売れば300円の儲けになる。空売りとは簡単にいえばこれの逆で店に陳列する商品がないのに800円で品物を売ってしまう、カラの商品を売るのだ。

もちろん存在しない商品をうるのは詐欺だから、通常はそんなことは許されない。では株取引ではどうしてそういうことが可能になるのか。

それは仕入れた株の代金を将来に下落した価格で後払いする、というカラ売りの仕組みで可能になるのだ。

具体的にいえばこうだ。

今の相場で800円の株を500円で売るなら買い注文は殺到する。一万株の売買なら他よりも300万円も安いのが当然だ。しかし仕入れた方が市場相場800円で仕入れたとするなら、そのまま売ってもトントンなのに、この場合売らんがために300万円の丸損となってしまう。

しかしながら、この株が仕入れの支払い期日である一ヶ月後に100円になってたとして。このケースの株の仕入れ代金は時価の800円ではなくこの将来の価格でよいのだ。そうすると、暴落時の未来に100円で仕入れたものを今500円で売ったことになるのだから、なんと架空の時間旅行にもかかわらず、現実全体で400万円の儲けができる。

こように株の仕入れ代金の準備が決済日の価格でいいのだから、確実に値下がりする株の銘柄をもし何らかの方法で事前にキャッチできるとしたら、大規模なカラ売りをしかけることで100%確実な巨額の儲け話が可能になる。

タイムマシンで将来のボロ株を大量に買い付けて、現在に再びタイムマシンで戻ってきて、自分だけが見てきた未来の不幸は知らないふりをして株を売却すれば大儲けになるのは当たり前だ。

その代わり目論見はずれて株が暴騰し、支払日に1800円になっていたならば、その日1800円で株を買った上で借りた株を返さないといけない。今度は500円で売れていても焼け石に水で、闇金から金を借りても1300万を用意しないといけない。

だから空売りをした人間にとっては極端な話、その株を発行した会社の理想的な将来像とは企業が破産して関係者全員が不幸にどん底に突き落とされた状態だ。会社倒産状態こそが一番安く紙切れになった株を買って過去に借りた株を返せる状態だからだ。

「ほう。なかなか面白いことをいうね。面白いだけではなくて空売りの本質を見事に言いあてているように聞こえなくもないが…」

「違うでしょうか」

カラ売りをさせようとしているシャイロックに対してユキコは自信を持って自分の考えを言ってみた。

堀木は何かを言いたそうだったが、シャイロックの次の言葉を待っていた。

「私はそうは思わない。それに私は君たちを仲間だと思っている。仲間にそんなひどいことをさせようとは思わないさ。利用しやすそうだからではないし、堀木社長の父上が以前から私が手に入れたと思っていた特許の所有者だからだというだけではないのだよ。私は話をしているうちに堀木社長の人物に惚れたのだよ。君は何か自分では背負いきれないほどの大きな過去、そして密かに誓った自分の思いをしっかりと胸に秘めてこの船に乗ろうとしている。いや、はっきりいえば、その強い思いのために、あえて危険な私の申し出にホイホイと軽薄を装って乗ろうとしているね。そこはもしかするとユキコさんも気がついていないしれしれないが、大した役者だと思

うね。君が抱えているもの、それが何なのかはまだ私にはわからないし、今聞いても君は答えはくれないだろうし、私もそれを強制はできない。聞いてみたいとは思いますが、それはもっと後の楽しみでいいんだ。もっと友情が深まってからでもね」

ユキコは意外な展開に目を見張った。

さっき堀木くんがシャイロックに対して言ってた、あいつは単なる金の亡者じゃない、というのと同じことをシャイロックも堀木くんに対して感じている？

「カラ売りはね、美学だよ。債権取引の...」

シャイロックは静かに、しかし貫禄たっぷりに微笑みながら堀木に言った。

「お聞かせ願えますか。その美学を」

「もちろんだとも」

シャイロックは古い友人でももてなすように、棚から再びブランデーを取ってグラスに注ぎ、堀木の手を取らせたのだった。

「ユキコさんはさっき将来の不幸と言ったね」

シャイロック2. 0はユキコにもブランデーグラスを渡した。

ユキコはさっきとは違った気分でそれを受け取った。もちろんいきなり仲間だと言われても実感がわからないが、少なくとも堀木はシャイロック2. 0に対して由紀子が見えていない何かを感じている。

その何かを知りたいと思った。

それはまたシャイロックへの興味だけでなく、堀木への思いだったかもしれない。知りたい。あなたが何を感じて、何を抱えているのか。あたしより先にシャイロックが見抜いたあなたの何かを知りたい。ユキコは堀木を切ない思いで見た。

「はい。もし失礼だとお感じになったら謝ります」

ユキコのこの言葉にシャイロックは首を振った。その目には堀木に対してのようなビジネスを越えた打ち解けたものが混じっているようにも見えた。

「君は知ってるかな。アメリカは先進国で唯一、全国民に加入義務が課されている医療保険制度がない。医療をまともに受けられない貧困層の存在はあまり日本のマスコミは取り上げないね。一方で金持ちだけが受けられる先進治療技術は世界最先端だ。これはアメリカの凋落がどれだけ声高に喧伝されようとも動かし用のない事実だしそう簡単に将来もそれが崩れることはないだろう。」

ユキコはシャイロック2. 0の話の意図がわからずただ頷いた。

「私は毎年二億ドルをそうした貧困層の医療補助活動団体に寄付している。」

シャイロックはそう言ってパソコンのモニタの特許トレーディングのソフトを閉じて見せた。デスクトップにはシャイロックと女の子が写っている。

ユキコと堀木はデスクトップの壁紙を覗き込んだ。ブロンドの中学生くらいの女の子がホールのピザを片手にもって大口を開けて今にも食いつきそうにしてる。その横で少女に肩に手を回して幸せそうに笑っているのはシャイロックだ。シャイロックはずいぶんと若い。まだ三十台後半く

らいに見える。

「娘だ」

「可愛いですね。シャイロックさんも毛がフサフサしてます。」

ユキコはブランデーを渡してくれた時のシャイロックの親しみのこもった目に甘えて、少しだけ冗談を言ってみた。

シャイロックが声を立てて笑った。

「そりゃそうだ。もうこの写真は四十年近くも前のものだからな」

シャイロックは自分の見事なスキンヘッドをペタペタと叩きながら言った。

「じゃあ、お嬢さんももう結婚されてお子さんもいらっしゃるんでしょうね」

堀木もユキコの好きなあの人懐っこい笑顔でそう言った。

「うむ。生きていればな」

堀木はすぐに謝ろうと口を開きかけたがシャイロックがその必要はないと静かに首を振った。

「十分な医療を受けさせてやることができずにね。助かるはずの命だったのにみすみす死なすことになってしまった。」

それであるアメリカの医療の話をしたのか。ユキコと堀木は目で頷き合った。

「当時私は投資銀行を退職して自分の裁量で投資活動を行っていた。収入は銀行時代の十倍ほどはあっただろう。しかしなれない先物取引で全財産をなくしてね。妻とは離婚して娘と二人毎日食べていくにも困るような日々だったよ。このピザはアンジェラの14歳の誕生日のご馳走だよ」

シャイロックは娘に語りかけるようにディスプレイを眺めてそう言った。

「破産するまではね、娘はボストンの医療施設にいた。それこそ一日の医療費が日本円で三十万くらいするところさ。手術も決まっていた。費用は約二億円。破綻前の私なら何の問題もない金

額だ」

シャイロックはディスプレイにそっと触れた。アンジェラの頭を撫でるように。

「追い出されたよ。うちの病院も余裕がないから高額のベッドを無償で提供することは不可能だと病院から言われてね。手術も当然取りやめになった。」

堀木と由紀子は無言で頷いた。

「まあ当然さ。私は破綻で首になるまでは株式公開をしているその会社の会計コンサルタントでもあったからね。私自身が院長に対して医療費を払えない患者は即刻見放すように口を酸っぱくして経営アドバイスをしてきたんだ。その対象が自分になっただけで、それ自体には何の恨みもない。自分の仕事の失敗が悔やまれるだけだ。」

シャイロックはそこで深呼吸をした。

「許せないのは、医療費の水増し請求やらなんやかんやらの不正経理の実態を事細かく知る私の口を封じようとしたことだよ」

「え！口を封じるってまさか」

ユキコは思わず叫んだ。

「そう。何度か殺されかかったよ。車に跳ね飛ばされそうになったし拳銃でも打たれた。いつハドソン川に浮かんでもおかしくない毎日だったね。しかし今死ぬわけにはいかない。殺される前に奴らの息を止めないと、娘の新しい医者を探すどころじゃなくなってしまう」

「でもどうやって」

堀木が身をのりだしてシャイロックに尋ねた。

「カラ売りだよ」

シャイロックはグラスにブランデーを注ぎ足しながら静かに言った。

明かされるカラ売りの美学～空と君の間に

「警察行って身の安全を保証してもらうとかは考えなかったんですか」

堀木が憤懣やる方ないと言った感じで問いかける。

病気のアンジェラを金が払えないという理由で追い出した挙句、秘密を共有していたシャイロックの命まで狙おうとした病院の経営者に堀木は本気で憤っていた。

ビジネスマンとしてこういう直情径行がよいのかどうかわからない。でもユキコはシャイロックの存在は予想に反して堀木のあの、世界との冷たい距離感をとかしてくれるのではないかと思い始めた。

「もちろん保護を依頼したさ。しかし証拠がない。警察は君の国でもそうだと思うが犯罪の捜査はしてもボディガードはしてはくれない。そして私はボディーガードを雇う金はなく、向こうはヒットマンをいくらでも雇う金があった。ま、簡単にいうとそういうことさ」

「なんてこった」

堀木はアメリカの映画でよくある、ガッデム！という動作でスイートルームに壁を激しく叩いた。

その少し芝居がかった動作にシャイロックは満更でもなく頷いてそうだろ、ひどい話さ、といった顔をする。

「そこで奴らを破産させることにしたのさ」

「カラ売りですね」

ユキコが相槌をうつ。

「その通り。カラ売りは元々特殊な投機テクニックなどではない。要するに評価されすぎている株がどういう理由で評価されすぎているのかをきちんと明らかにしながら、市場を巻き込んで売りのトレンドを誘導して、本来あるべき適性価格に近づけて行くことさ。正しくは。分かるかね」

シャイロックはさっき自分に対して果敢にも「カラ売り不幸待望説」を披露したユキコに紳士的

にこう言った。

「それは分かります。シャイロックさんがどんどん悪徳企業の株価を下げさせていって、紙くず同然のところまで追い込んでやれば自動的に倒産ですものね。その病院みたいにとんでもない会社はむしろ倒産して当然だと思います！だからシャイロックさんはどんどん空売りすべきです！」

「なんだ、あっさりそういうか。さっきのあのご高説もあれはあれで一理あると思うがね」

「ありがとうございます。でもそういう市場から退場すべき企業にはどんどん空売りをすべきだと思いました」

シャイロックは拍子抜けしたように、しかし上機嫌に笑った。

「成功したんですね」

堀木がまるで手柄話をせがむように訊ねる。

「ああ、もちろんさ。実は今ではそういうカラ売りを投機ではなくきちっと財務諸表を分析して、ある指数が出た場合にはカラ売りトレンドを形成するというのはウォール街では一般的なのさ。その基礎を作ったのがこの私だ。名だたるファンドマネージャーに片っ端から声をかけて、評価され過ぎの企業にカラ売りをしかけて適性価格にする、場合によっては廃業に追い込むようなスキームを作ったんだ」

「シャイロックさんすごいです！」

ユキコが感嘆の声をあげた。

「単純なやっちゃんな～、ユキコちゃんも…」

堀木は呆れ顔でそう言った。

「うるさいわね。あんたに言われたかないわよ」

「まあまあ、お二人ともオサエテオサエテ」

シャーロックが流暢な日本語で割って入ったのでスイートルームは爆笑の渦に包まれた。

「この部屋にきた時に君たちに言った同じ言葉をもう一度繰り返していいかな。」

笑い終わるとシャーロックは言った。

二人は頷く。

空と君の間!

埋め尽くせ!

人の信用という錯覚で!

錯覚はいつしか真実そのものの虚偽となる

錯覚は本物以上の真実となるのだ!

人の真実とかいうまやかに騙されるのはもうやめろ

愛する人間をこれ以上傷つたままにするんじゃあない!

将来の富と現在の不幸の間を

誇り高き起業家精神をもって君が埋め尽くすのだ!

「まだあなたのことを全部信用したわけじゃありません。その言葉にもまだ領けない不可解な部分がたくさんある。でも...」

堀木が静かにそう言った。今まで見た堀木の中で一番頼もしい姿だとユキコは思った。

「「愛する人間をこれ以上傷つたままにするんじゃあない！」ってアンジェラのことだったんですね。」

ユキコがシャイロックをまっすぐ見て言った。

「ああ。時に市場を恐怖のどん底に突き落とす極悪非道の悪名高きカラ売り屋シャイロック2.0はこうして誕生したのだ」

スイートルームのクリスマスイブ

シャイロックの部屋での仕事の打ち合わせはその後数時間も続いた末に終わった。

カラ売りは米国のシャイロック2.0の会社の人を使って堀木が指示を出す。

その内容についてはおおまかなトレンドを定期的に堀木とシャイロックが打ち合わせ。細かい売り買いの注文は堀木がパソコンから行う。そしてなぜか全体会議にはユキコもオブザーバーとして参加することとなった。

資金は来週中に五億円の転換社債の手続きが完了とのことで、資金は当面問題ない。

そうだ。問題はない・・・。

いや、ユキコには大問題がひとつあって、それは長い打ち合わせで終電がなくなってしまったこと。タクシーで帰ろうとしたがものすごい行列でいつ乗れるのかまったくわからない。通りに出てみたのだが空車は一台も通らないのだ。

もう一度ホテルに取って返してフロントに掛けあってみたのだが、他の日ならともかく今日はちょっと空車はホテルでもすぐには手配できないかもしれないとのことだった。

そう。

今日はITバブル真っ盛りのクリスマスイブ。

終電は終わっても人々は夜を徹して都会の森のイブを楽しんでいる。ホテルに泊まろうにも、タクシー以上にホテルに空室はない。今日は男と女にとってそういう日なのだ。

ユキコは困り果ててシャイロックに電話をした。

「堀木くんは先にチェックインしてるよ。年寄りにはもう男女のことはわかりませんが、まあいいじゃないですか。スイートルームのベッドは一つじゃないしさ」

シャイロックは心配してくれてるんだかからかっているのだからわからない、ビミョーな日本語でそう言った。

実はシャイロックとの打ち合わせが終わったあと、シャイロックは終電がないことを確認すると、その場でフロントに電話をして部屋の空きを確認してくれたのだった。クリスマスイブにこのホテルに空室などあるわけないと思ったのだが、あっさり一部屋だけとれた。シャイロックの部屋と同じ階のスイートだ。

シャイロックは別に意外そうでもなく、こういうホテルでは急なVIPのブッキング用に必ず部屋は用意してあるのだという。スイートを数カ月単位で借り切っているシャイロックがフロントを通せばそういう部屋はおさえられるらしい。

シャイロックに聞いた部屋番号までたどり着いてチャイムを鳴らした。

普通の一軒家のような落ち着いたチャイムの音がして、しばらくして堀木が「ようこそユキコ様」と執事のように言ってドアを開けた。

「なあ、すごいなあ。俺スイートルームに泊まるなんて初めてや」

堀木が浮かれている。まだダブルベッドの上でトランポリンを始めないだけでしたけど、堀木のはしゃぎ様からするとそれも時間の問題のようにも思えた。

「クリスマスイブだったんやなあ。ここんところ仕事のことで頭いっぱいそんなこと全然気いつかへんかったなあ」

ユキコはとりあえずコートと、仕事用の取材の資料がたくさん詰まった、ユキコの肩には少し

大きめのトートバッグをソファに置いて部屋を見回した。

すでに暖房は広い部屋に心地よく行き渡っていて、窓際にはクリスマス用に大きくて立派なツリーが飾ってある。

堀木は今度は飾ってある大きな樅の木のオーナメントをいじって、すげーとかチョーかわいい！とか言ってさわいでいる。

ユキコはもちろん堀木との突然のイブが嫌ではなかったのだけど、こんなに突然こういうシチュエーションが訪れるとは思ってもみななかったので戸惑いを隠せなかった。

どうせ今付き合っている人もいない。いればイブにライターの取材の仕事なんてしてないだろう。

それに今まで男性と付き合ってきたても、あまり長続きしなかったのは心のなかに堀木がいたからだと今日一日でそれを実感することができた。

幸せなハプニングのはずなのだけど・・・

「ねえ。堀木くん、すこし落ち着こうよ。」

「あ！ごめ～ん、せやったな。シャワー先浴びてくる？」

「あのね・・・。そこにあるコーヒーでも入れてくれたらいいじゃない。それになんで「先」なのよ、シャワーが。なんかいきなり変なこと考えてないでしょうね」

「おっと、そっかごめんごめん。そういうつもりじゃなかつたんだけどさあ♪」

楽しそうにジングルベルの鼻歌を歌っている。

もうすこし最低限のデリカシーというか、奇跡のような再会のクリスマスイブにふさわしい雰囲気欲しかったな・・・

ユキコはなんだか少し悲しくなってくる。

ユキコはちょっと一息入れようと思って、さっき脱いだばかりのコートをと財布を持って部屋の外に出ようとした。コンビニでコンタクトレンズの洗浄液とケースを手に入れたい。

「ちょっとコンビニ行ってくるけど、なんか欲しい物ある？」

「え？コンビニ？明日の朝用の下着でも買いに行くの？」

ユキコはベッドルームの扉を思いっきりぱたーんと閉めるとコンビニを探しに行った。

アスファルトに咲く花～ユキコの胸中

「ただいま」

「あ、おかえり」

チャイムを鳴らすと堀木が開けてくれた。

出かける前のようなはしゃいだ雰囲気はなかった。少しは反省したのかな。ユキコは思った。

「結局近くにコンビニがなくて新橋の方まで歩いたよ～。もうね～すごい人。」

堀木は有線放送のクリスマスソング特集を観ていた。

「あ、徳永さん大好き～」

「はい、どうぞ。コーヒー」

外から帰って体が冷え切っているところにこホットコーヒーが出てきた。堀木がポットでお湯を準備してくれてたらしい。ユキコの機嫌も少しずつ直ってきたようだった。

「もうさあ、いろんな難しい話出てきて疲れちゃったね」

「ああ、ほんまやな～。真剣勝負そのものだったしな。ユキコちゃんも疲れたやろ」

堀木は優しく微笑んだ。コーヒーの暖かさと一緒に、幸せな気分がユキコの心の中にも染み渡ってくる。

「どうしたの？出かける前と違って大人しくなってるぞ」

堀木がテーブルの上のシャンパンクーラーを指さした。あの誰でも名前は知ってる高級シャンパンだ。

「シャイロックがさ、ユキコさん来たんだったらってことで、プレゼントしてくれたんだ。部屋に取りに行ったんだけど、ユキコちゃんもいなくて暇だからまたいろんなこと話した」

「そっか。うん。途中からさ、なんか男同士のツーカーみたいな雰囲気あったよね」

「そっかな」

「うん、そうだったよ。すごくカッコ良かったし、なんだか羨ましかったよ」

「へえ」

堀木はユキコかなにか話したがっている様子を感じとって、ナイフでシャンパンのキャップに切れ目を入れて乾杯の用意をした。

「いやあ、やっぱさ。マスコミって女性は限界あるわ。こんなこと言っちゃ頑張っている女性記者の人に怒られちゃうけどね。」

ユキコはソファに沈んだずっしりと重たい自分のトートバックを一瞥した。取材にたくさんの資料を持ち運ぶのは半人前の記者の証拠だといつも先輩から言われている。

確かに日本で最大部数を誇る新聞社の社会部の記者だったユキコの父親も、外出する時は会社で支給される小型の手帳とボイスレコーダーしか身につけていなかった。事件記者として新聞協会賞を何度も受賞したことのある父親はユキコがマスコミの世界にはいるのには反対だった。いや、反対というよりはむしろ、戯言としか考えていなかった。

女には無理。

女性が反発するその言葉をユキコの父は何度も使った。なぜ無理かは説明もしてくれなかった。ただ、「お前は社会部の記者になったら刑事と同じように張り込みをしたり、暴力団の事務所に組長に会いに行ったりできるのか」ということは何度か言われた。必要であればそういうこともする、とムキになって言い返したものだが、今になってわかることが少しだけある。

ジャーナリストが、取材対象から一步距離を置いて客観的で公正な記事を書くのはもちろんだ。しかしそれは記事を実際に文章にする段階であって、取材の過程においては時には捜査一課の刑事のような、時にはマル暴の捜査四課の刑事と同じような視点を持たねばならない。そしてあ

る程度は行動もだ。その中で取材源の刑事たちや容疑者たちとの信頼関係も生まれ、他社では取れないスクープが自分の周りに集まるようになるのだ。

ユキコが身を投じたのは社会部ではなく経済関連だったが、父の言っていた認めたくない事実はやはり感じざるを得ない。トートバッグの中身の重さは、その重みの分だけユキコが取材対象先から重きをおかれていれていない証左であるように感じることも最近多くなってきた。

そして今日それを痛切に感じた。

たぶんいろんな知識の量では、堀木よりも自分のほうがトートバックの重さの分だけ勝っていただろう。でも、そうじゃない。堀木は完全にシャイロックの信用を勝ち得ていた。

「いいよね。すごいと思う。お互い警戒しながら、お互いの腹の中も探りながら、でもお互いの利益になるところや、お金だけじゃない信頼関係の接点になりそうなところを短い時間ですごい勢いで確かめあって形にしていった」

堀木はさあどうかなといった表情で優しく微笑んだ。

「とりあえず奇跡の再会に乾杯しよ」

堀木が栓を抜くか？とシャンパンを渡そうとしたが、ユキコは内心のたくさんの思いと裏腹にうまく言葉が出てこず、これだけしゃべっただけで少し疲れてしまい、そっと首をふった。

ポン、という乾いた大きな音がユキコ胸に響いた。

不思議な成長の仕方をしたね、堀木くん。

人懐っこさにちょっと拗ねたところが加わって、大人の世界を自分なりにちゃんと横切って、そしてまたぐるっと回ってここに戻ってきている。軽薄なふりして自分の懐に入り込もうとしてるって、あのシャイロックがそう評価してたね。あたしもそう思う。すごいよ。

素敵になったよ、とっても。

「どないしたん。泣いとんのか」

なんの涙だかわからない。

再会の喜びと、仕事の疲れと、自分の能力のこと……。そして堀木くんが素敵になったこと。自分にはとてもかなわないこと……。でも、だからこそ余計に好きになったこと。

堀木は昼間のためらいのある態度とは違い、ユキコのシャンパングラスをとりあげてテーブルに置くと、その手をとって引き寄せ自分の胸に強く抱きしめた。

二人はまっすぐに見つめ合った。

堀木はユキコの頬の涙を指でそっと拭いて優しく唇を重ねた。

「ユキちゃんまだ半分寝てるんちゃう？」

堀木くん？

あれ、いつもと違う呼び方。

一瞬だけ、堀木くんのやつ今朝から呼び捨てにしやがったなと思った。違うみたいだ・・・

「ユキちゃん」

「あ、おはよう。うわなんだこれ」

「いやあ、気分出るかな～と思ってさ、前なんかの映画で見たんだけどアメリカ人って休みの日はベッドで朝ごはん食べるんだろ。おれよく知らないけど」

堀木がまだガウンを羽織ったままいそいそとコーヒーを入れたりしている。

ユキコはまだベッドの中にくるまっている。目を開けると目の前に朝食のプレートがあったのだった。

「ああ、それで堀木くんが頑張って運んできたのか。そーだなー。そういえばそうなのかなあ。よく知らないけど」

「ま、いいじゃん、せっかくだからこうしようぜー」

「うん」

「ユキちゃんこういうの好きでしょ」

「まあ、気分でていいかな。ところで今日からどうしてユキちゃんなの？」

堀木はにやにやした。

「だってさあ、いきなりユキコとかだと、なんかアホみたいやん、調子こいてるっつーか」

「・・・」

「だけど同じユキコちゃんっていうのもあれだなあ・・・とか思って間をとってユキちゃんにしてみてん。どう？」

「・・・。誰からもそんな呼ばれ方されたことないからもとに戻して」

「・・・あっそう？」

堀木は少し残念そうだった。

わかってないなあ。ユキコはすこし気の毒になった。

「違うよ。中学校の時からユキコちゃんだったでしょ。その呼び方で呼んで欲しいんだよ」

堀木の顔が明るくなる。単純で可愛い。

「あ！そっかそっか、じゃあユキちゃんはまだ10回も使ってないけどおしまいだー」

ベッドの横に堀木が滑りこんできた。

悪くない朝ごはんだ。

「ねえ、ところでさ。お父さんの特許ってどんな特許なん？ロケット飛ばせるって言ってたけど。ホントに飛ぶの？」

堀木はニヤニヤしながらユキコを見た。

「なによ」

「いや、可愛いなと思って」

「は？」

「ロケットが飛ぶとか言ってなんか子供みたいやーん」

「だってそーでしょーが。お父さんの特許についてかいつまんで教えなさい」

考えてみれば何億円もの話を聞いておきながら自分は特許の中身について何も知らなかった。

「実用化されているものと電動シェーバー」

堀木はオムレツのケチャップをきたなくかき混ぜながら口に運ぶ。

「ああ、髭剃りかぁ。ちょっと縁ないけどあれと宇宙ロケットってもっと縁がないというか、関係ないやん」

「縁はあるで。ユキコちゃんにも、ロケットにも」

「え、どなんん？教えて」

ユキコはさっき堀木が言っていたように、自分が小学生になって人気のある理科の先生に質問をしているような気がした。

これも悪くない。

「うん。まずさユキコちゃんに関係のあるのは、なんちゅうーかー、まあそのビキニをつけたり

する時に大事なところまず剃ったりするというかあ…」

ダメだ。一夜明けたらまた元の堀木に戻ってる。ユキコはため息をついた。

「そんで」

「うわ。ユキコちゃん怒ったんか。ちゃうねん。ほんまにそれ松下幸之助の会社で製品化されて売ってるねんで。ちょっとものがものだからテレビCMはないけど」

ユキコの顔が少し顔が怖かったのかも知れない。堀木は怯えながら慌てて釈明した。

そういえば、女性向けの通販雑誌なんかでは定番で載ってる。あれの重要な技術を堀木君のお父さんが作ってたのか。

「あーわかった。あれか。じゃあロケットとどう関係すんのよ」

「うん。毛のデリケートさなんだよね、要するに。今世界のシェーバー市場はフィリップスとブラウン二社だけで70%くらい占めてるんだけどさ、女性用のその製品だとうちの親父の特許が絡んでるのが世界の9割なんだよな」

！9割？

完全な独占市場じゃない。ユキコは驚いた。

「というのな、男性欧米人の髭の濃さがだいたい平均200ミクロンなんだけど、日本人は120ミクロンしかないんだ。これが日本人女性で、しかもあそこの部分の話になるとなんと20ミクロくらいしかない。だから、フィリップスやブラウンのをそのままユキコちゃんが肌に当てると大変なことになるわけ。朝のラッシュなんかでさ、出かける前の髭剃りで肌が剃刀負けしてもうて、ほっぺたに髭剃りの剃り傷作ってもうてるサラリーマンとか見たことないかな。」

「それあるわ！見たことあるよ。何度も！」

ユキコの頭の中で何かははっきりつながった。関係大ありだ！

「でさ、その肌が傷つかないように振動を無振動とも言えるほど小さくして、なおかつ欧米人男

性の十分の一の濃さのものを処理するには激しい金属運動に耐えられる専用の装置の台、つまり特殊な金型が必要になる。毛は柔らかくて細いほど剃りにくいから逆に運度量は何倍にも増やさないといけない。この製造技術はフィリップスやブラウンには当然ないわけ。もともと彼らには必要なかったから」

「それを堀木くんのお父さんが？すごい！それがロケットの振動の吸収とかにも関係する！？」

ユキコは思わず叫び声をあげた。

あり得るな、その特許は。素人でもその特許が製品の根幹部分だということは直感的に理解できる。

「それがな、こっからがまあシャイロックが俺に近づいてきた理由だとオレは考えてるんだけど、親父のところにはこれまで一円の特許料も支払われてないんや」

ユキコのブロッコリーを刺したフォークが宙で止まった。

「そんなバカなことって」

「あるんだなこれが」

堀木がフォークの先のブロッコリーを手で掴んで自分の口に放り込んだ。

「実際に特許は取得したんや。でも所詮特許での金儲けは素人の親父がやったことや。りっぱな浄水器作っても水道の蛇口ひねるような部分の周辺の特許押さえられてしもて、全部その辺り大企業にまかせてしもた。周辺特許への特許料の支払いを大企業が肩代わりする代わりに親父の特許はただで使われてるんやな。どう考えても周辺特許への支払いが親父の特許の価値と相殺になるはずないんやけど、まあ、うまく納得させられてるのかもしれへんなあ」

なるほど。特許は持っているだでお金を生むと考えるのは素人なんだな...

ユキコは頷いた。

一億円の特許トレーディング

「おはよう」

シャイロック 2. 0は朝食後仕事部屋のスイートルームを訪れた二人ににこやかに言った。

「よく眠れたかね」

シャイロックが尋ねると堀木は一瞬間を置いてから頷いた。

それを見たシャイロックは、ちらっとユキコの方を見て、少し訳知り顔で

「うむ。結構」

と頷いた。

昨日の晩のベッドでのことを思い出してユキコは少し顔が赤くなりそうだった。

堀木はとぼけた顔で頷いている。

「され、では具体的にここでトレーディングをやらしてもらおう。」

アンジェラが今にもピザを食べようとしているパソコンの壁紙の上に、シャイロックが特許トレーディングソフトを立ち上げた。アンジェラの顔が行ってらっしゃいと玄関まで見送った後のようにずっと背後に隠れて株式ソフトのようなグラフや数字がたくさん並んだ画面が出てきた。

「仕組みをもう一度おさらいする。基本的にこの特許トレーディングはアセットファイナンスだ。つまり株式や社債のような企業全体の時価総額ベースのコーポレートファイナンスと違って、特定の資産、つまりアセットを本体の格付けとは別の尺度で証券化したものだ。」

シャイロックの言葉にユキコが頷きながらさらに言葉を加える。

「つまり本体の会社の格付けが投資不適格のダブルBとかでも、この特許市場ではトリプルAとい

うことがありうるわけでしたよね」

「その通りだ。だから銀行や株式市場で資金を調達することが困難ではあるけれど、大企業に負けないような特許を保有している会社は、私の創設したこの特許トレーディング市場に自社の特許を債券化して流通させるわけだ。ズバ向けた特許を持っていれば銀行や通常の株式市場が相手にしなくてもここで莫大な資金が調達できる。」

堀木が少し自信なさそうに頷く。

堀木はユキコのようにはまだ完全にこの市場の仕組みを理解していないらしく、ユキコに確認するような目を向けた。

ユキコは昨日深夜夜勤の同僚記者に不動産などのアセットファイナンスの仕組みについて大量のファックスを送ってもらっており、堀木が自分ベッドの隣で寝息を立てたあと、明け方までその資料に目を通していたのだった。

今自分にできることはトートバッグの重さが増えることを厭わず、手順や背景知識を正確に整理して堀木を助けることだと思っていたからだ。それを素直に自分の役割だと感じる事ができたのは堀木のおかげだと感謝しながらユキコはさらにシャイロックに確認する。

「会社の株式と同じようにあるパーセンテージを握った場合、特許に対する権利が行使できるということでしたね。」

「そう。頼もしい参謀だね。今は冷やかしではなくて本当にユキコさんが堀木社長のコンサルタントのようだな」

シャイロックがそういうと堀木は真面目に頷いた。

「この仕組みの場合発行債権の過半数を握ると株式の会社乗っ取りと同じように、特許そのものを乗っ取ることができるわけですね。」

「そうだ。10%を握れば独占ではない使用权、34%で独占使用权、そして51%を握ると株式の権利の譲渡や廃止も可能になる。今回は堀木くんの父上の無振動モーターの行使を意図的に邪

魔する周辺特許を叩き潰すことが目的だから、リストアップした企業の特許の51%を奪取して支配権を奪うまで金に糸目を付けずに徹底的にやる」

二人は頷いた。

「そもそも堀木くんの父上のあの革新的な特許は、こういう周辺特許を押さえて真に革新的な特許の行使を妨害して和解金や法外な使用料を払わせようとするパテントマフィアが存在がなければ、すでに巨万の富をすでに君にもたらしているんだよ。わかっているとは思いますが。その本来手にするはずだった富を君は取り返すんだ。わかるね」

堀木は頷いた。

これがさっきブロッコリを食べながら堀木くんが言っていたことか……。ユキコは合点が行った。

「早速午前中に一本落としてみよう。軍資金は一億。私が横についているから二人にやってもらいたい。」

堀木とユキコは緊張の面持ちでトレーディングを始めた。

悪魔のシャイロック

午前中の取引はあっという間に終わった。

最初に特許の発行済債権の51%を握ったのはテキサス・ルネッサンス・テクノロジーというアメリカの片田舎の会社だ。

この会社は堀木の父親の町工場堀木製作所の重要な周辺特許を所有していた。実用化にあたってはここに巨額のライセンス料が発生している。現在は資力と交渉力のない堀木製作所に代わって世界に冠たる松上電器産業がそれを支払っているが、この調子で特許を買収して行けば、そうした力を松上電機産業に借りる必要は一切なくなり、堀木製作所は松上電器産業と対等に立場に立つことができる。

現在は無振動シェーバーを世に出すためには、松上電器産業による周辺特許の押さえ込みが必要なわけだ。しかしシャイロックの資産とこの特許トレーディング市場を使えば、一介の町工場がその特許の莫大な恩恵を大企業を通さずに手中にすることが可能になるのだ。

テキサス・ルネッサンス・テクノロジーは典型的なパテントトロール、トロール=妖精、妖怪という名前が付いているが、弁理士と弁護士、さらに資金の潤沢なベンチャーキャピタルなどが背後であやつる法廷闘争によって特許に難癖をつけ、和解金をせしめるパテントマフィアに他ならない。

前日にシャイロックが国際電話をしたなかでは落ちなかった企業だが、もともと自分の保有する特許を高値で売買することにはやぶさかでなく、シャイロックの電話での交渉を拒んだのもこうして市場で特許が買われたほうがより高く売れることを見越してのことだった。

売り買いの小競り合いが続いたが結局買収金額は合計7800万円。予算一億円の中に十分収まる金額だった。

この調子で行けばあっという間に堀木製作所は大変身を遂げることになる。

「お昼の準備できました」

ユキコがルームサービスで頼んであったサンドウィッチとコーヒーの簡単な昼食を並べた。

「上々の滑り出しだ。この調子で残りのあと残りを片付ければ来週中くらいには堀木製作所は松上電器産業を切ることができる」

勝利の昼食のはずだったが、ことの重大さに堀木の口は重い。

「もう一度整理させてください」

ユキコがシャイロックに問いかける。

「このシナリオはあくまでも堀木くんのお父様、堀木製作所が独自の特許戦略を取る、つまりシャイロックさんが提示してくれたシナリオに乗ることを大前提としていますよね」

「その通りだ。全ての鍵は堀木社長が、父上の会社から特許を譲り受け、現在の大手家電メーカーとの契約を解消することだよ。」

ユキコにはそこが心配でならなかった。堀木は父親は自分に頭があがらないから大丈夫だと言っているが本当にそううまく行くのだろうか。

「堀木製作所が堀木社長のソーシャルスマッシュに予定通り特許を売却する。その段階こちらのシナリオ通りだ。そしていったん無反動シェーバーはこの世からなくなるわけだ。松上電機産業ブランドのものとしてはね。なぜなら君のお父さんの特許なくしてあの製品はあり得ないからな」

「松上電器産業は怒り狂うでしょうね。」

堀木が重苦しい表情で言った。

「なにかまうことないさ。これはビジネスだ。」

シャイロック2.0は事もなげに言った。昨日もそして今朝もあったシャイロックの独特の親しみ深さはすっかり消えてなくなり、初めてあった時のような得体のしれない奥行きを持った恐怖のカラ売り王がそこにいた。

「松上が契約不履行で訴えるなら訴えればいい。その前に父上の会社をバラバラに解体して、金になりそうなところだけこっちで買ってしまえばいいのさ。かつてヴェニスで私のご先祖様がやろうとしたように、ナイフで人肉を切り取ったらいいのさ。法人は血を流しても死なないから現代の人肉裁判で私が敗訴することはないのだ。それは現代ではM&Aと呼ばれてることは知っているね。そして残った松上の契約もろとも堀北製作所は潰してしまえばそれでおわりさ。松上電機産業がいかに世界に冠たる巨大企業であろうとももうどうすることもできないよ」

涼しい顔をしてサンドイッチを頬張りながらシャイロックはそう言った。

「その時従業員は…」

堀木は沈痛な面持ちで言った。

「そんなことは堀木社長の知ったことじゃないさ。路頭に迷う者は迷うし再就職できるものは自分の手でまた未来を切り開くだろう。違うかね？たとえその従業員に難病を抱えたこどもがいて、父親が破産して病院を追い出されることになったとしてもそれはその人間の自己責任なのだよ。責任は有限なんだよ。会社は潰せば終わり。従業員はリストラすれば他人さ。」

シャイロックは一瞬狂気を帯びたような目をした。

ずっとシャイロックが向こうを振り向いてパソコンの壁紙に目を移した。

アンジェラがピザを持って笑っている。

三十秒ほども沈黙があっただろうか。

こちらを向き直った時のシャイロックはまたもとの表面上は紳士的なシャイロックに戻っていた。

「もう一つ確認なのですが、シャイロックさんの儲けは今回どのあたりにあるのですか」

「今回の私の儲けはその手数料もさることながらこれから仕掛けてもらうカラ売りに便乗することによって巨額の売買益を得ることなのだ」

シャイロックはユキコに対し、いい話を振ってくれたとばかりに満足気に微笑んだ。

「テキサス・ルネッサンス・テクノロジーの周辺特許は押さえないと製品の実用化が無理だ。しかし例えばこの亜細亜電算という日本の会社、どうやら松上電器産業の資本が入っているようだが、この会社に現在松上電器産業が支払っている周辺特許料は、別の会社振り替えることもできる。他にも同様の周辺特許を持っている会社は調査したところたくさんあった。もっと安くすむところがね」

「松上電器産業は自分の息のかかった会社の方が都合が良いとかあったのでしょうか」

堀木が尋ねた。

「それもあるだろうが、天下の松上電器産業が特許戦略で情実で取引相手を選ぶことはないだろうから、コスト面でのメリットなどは当然あるだろう」

「しかしこの会社の特許は紙くずにしてしまおう。バタバタするならめんどうだから亜細亜電算ごと廃業に追い込んでしまえばいい。同じく路頭に迷う人間が発生しようが知ったことじゃない。」

部屋に緊張の空気が走った。

「無論その空売りの過程で大儲けができる」

二人はシャイロックの説明を無言で待った。

「現在債券価格が一口56000円だ。しかし...これが暴落して0円になったとする。いや、するのだよ。1億くらい使ってとりあえず買いを入れておくわけさ。そして買いの気配を煽るだけ煽っておいて、その中で目立たないようにカラ売りを小口でかけていく。価格が堅調ならばこちらのカラ売りはすぐに買いによって吸収されるからすぐに暴落は起きないだろう。玄人が見れば異様に売買高が膨らんでいる異常性が見て取れるわけだが、そんなところまで市場の数字を読む人間はそうそういないさ。そしてタイミングを見計らって堀木製作所は君の会社つまりソーシャルスマッシュに対して、現在松上電器産業に供給している無振動シェーバー関連の特許の権利を譲渡するといきなり発表するわけだ。」

「・・・・・・・・」

「煽るだけ煽っておいて、堀木製作所は君の会社つまりソーシャルスマッシュに対して、現在松上電器産業に供給している無振動シェーバー関連の特許の権利を譲渡すると電撃発表する。そして今後亜細亜電算の周辺特許は他の会社の特許で代替すると堀木社長自ら記者会見で発表するのだ。わかるかね？その瞬間松下との取引あつての亜細亜電さんの特許および会社の株価が大暴落するのは必至となる」

「・・・・・・・・」

「流動化している亜細亜電算の特許債権を調べたところ4万株が空売りできる状態だ。つまり、21億1600万円分の空売りができる。亜細亜電算のあの特許が松上電器産業の無振動シェーバーの周辺特許であることは市場も知っているから、この株は買気配の中であつという間に売れるだろう。」

「ということはつまり、堀木くんが社長のソーシャルスマッシュは一瞬にしてその21億1600万を手にするということになるわけですか」

ユキコが深呼吸しながらそう言った。

「その通りだ。一気にミリオネラ、億万長者の仲間入りだね」

「もし何らかの理由でカラ売りによる最終的に亜細亜電算シナリオがうまく行かなかったら」

「例えば、私と堀木社長が仲違いするとか、堀木製作所の社長がソーシャルスマッシュの社長と、つまり血を分けた親子関係がうまくいかないとかの場合かね？それは心配ないだろう。市場の思惑は今渡しが見切ったとおりに動くことは間違いない。それは仮にもカラ売りの帝王シャイロック2.0がいうのだから間違いない」

ユキコと堀木はゴクリとつばを飲み込んだ。

「まあ、最悪の場合、堀木社長は21億1600万の借金を負うことになるね。特許債権が暴落しなくて現在の水準を保った場合、堀木社長は来月の支払い時までには21億1600万を闇金融から借りても用意しなければならない。」

「・・・・・・・・」

ユキコは堀木の表情を探ったが、堀木は能面のように無表情だった。

「シャイロックさんの儲けは？」

ユキコがもう一度確認をした。

「株式市場においてカラ売りというのは証券会社から借りるのだよ。この債券市場のオーナーは誰かね。私の債権を堀木社長に貸してそれを運用してもらうのだから丸儲けだ。」

「でもれって完全にインサイダー取引になるんじゃないんでしょうか」

「そうさ。だから私は一切表に出ない。21億1600万の資金運用はあくまでも堀木社長の責任でやってもらうことになる。利益は折半がこの業界のこのケースの場合の相場だね」

！？やはりそうか。

「だから堀木社長は全てうまくいったあと、10億8000万円をコンサルティング料金として私の会社に支払ってくれたらいいわけさ。これに関しては成功報酬で構わないよ。21億1600万の借金を背負った人間に10億8000万円の支払い能力がないのは明らかだからね。私と堀木社長の友情に免じてそれ以上の責任は問わないこととしようじゃないか」

「さて、話の全貌が見えた。

いつものように、乾杯しようじゃないか。」

シャイロックはスイートルームに響き渡るように上機嫌で笑いながら、仲間の証である棚のブランデーを取りに行った。

あなたはいつ、夢をみますか

「最悪や。記者発表明日の夕方やのに親父のやつ取り付く島もあれへん」

堀木製作所の近くのファミレスで堀木はユキコを前にしてうなだれた。

「お父さんやっぱりダメだって？」

ユキコは憔悴顔の堀木を気遣うように言った。

「ああ、頑として無振動モーター特許売却には首を縦に振らない」

「お父さんとちゃんとお話できてる？特許売ると億万長者になれるとか、もし売らないと...」

ユキコは売れなかった場合堀木が背負うことになる20億の借金のことを考えると、目眩がしそうになった。

「もちろんや。あそうかでおしまいや。所詮他人事や。自分でなんとかせえいうことやろ。今まで散々好きかってやってきて俺に家族の尻拭いばかりさせてきやがって。そんでもそれを負い目に感じて俺が社会人になってからは何でもおれの言うことに従ってきたのになんでこの特許のことだけは自分の我を通すんや」

堀木は吐き捨てるように言った。

「明日夕方の堀木くんの正式な記者発表の前の世間での反応はむしろ、大企業と対等にパートナーシップを求める新時代の町工場ってことで評判上場よ。」

この一週間シャイロックの仕掛けたシナリオは芸術的と言っていいほどうまく運んだ。無振動モーターの周辺特許はすべて買収を完了した。さらに松上電器産業を切る総仕上げとしての亜細亜電算のカラ売りはも九割九分成功していた。

堀木製作所が松上電器産業とのこれまでの隷属的な関係を解消した上で、特許そのものを息子が社長を務めるソーシャルスマッシュに売却し、亜細亜電算の特許は今後使わない旨を近日中に

正式発表するらしいとの観測で亜細亜電算の特許債権は大暴落し、堀木とシャイロックはただ同然で空売りの決済をできそうであった。

しかし土壇場に来て、このシナリオの成否を握る鍵である堀木製作時の社長、つまり堀木の父親がシャイロックのシナリオに乗ることを拒否し、堀木は一気に空売り失敗による20億の負債を抱える直前の状態に追い込まれたのだった。

「そんなビジネスは堀木製作所じゃないとかいいよる。今さらなんの話や」

「シャイロックはなんて？」

「明日直接親父と話をすることになってるけど望み薄や。そもそもシャイロック本人に強烈な不信感を抱いとる。万事休すやな。不細工な話やで。血を分けた親子の意思疎通の問題で人生破滅や」

堀木はもうどうにでもなれといった投げやりな表情でそう言った。

ユキコはそんな堀木の目を真っ直ぐに見た。

「あたしも同席していいかな」

「え？」

「電話で聞いたお父さんの、堀木製作所社長の言葉の意味を会ってどうしても確かめたいの」

「いいけど、どんな？でも明日はそれどころじゃ・・・」

「ジャーナリスト生命かけて聞きたいことがあるわ」

ユキコは真剣な面持ちで堀木に言った。

ファミレスの窓からあの日と同じような綺麗な夕焼けが見える。

これが明ければもう運命の明日だ。

成功することなんてもうどうでもいい。

明日の夕方の記者会見までにお父さんを説得できないと堀木くんは亜細亜電算カラ売りの精算代金21億1600万を用意しなければならない。多分ビジネスマンとしての人生も普通の人生もその時一瞬で終わってしまうだろう。

「ねえ、ホテルの窓から夕焼けを見た時明日は誰にでも来るって言ったよね。あたしにも堀木くんにも、頑張ってるサラリーマン全員にも、そしてあの時は極悪人かと思っていたシャイロックにもちゃんと来るんだって堀木くん言ってた」

堀木はユキコがなんの話始めたのかわからず無言で頷いた。

「あなたのことずっと好きだったんだって、あの時はっきり思えたよ」

「お父さん、どんな明日でもいいってわけじゃないんだよ。」

『オレは夜夢を見る時間がないから昼間見てるんや』

「なんやそれ」

「電話であたしがお父さんに取材したときにお父さんが言っていた言葉よ。シャイロックの前でこの言葉の意味をあたしが聞いてみるわ。もしかするとそれで何かが変わるかもしれない」

ユキコはそこまでしか言わなかった。

堀木は初めて見るユキコの表情に、ユキコの言うジャーナリストとしての命をかけたプライドを感じた。

「あなたが好きよ、堀木くん。あたしが守ってあげるわ」

ユキコは自分の胸をおどけて叩いてみせた。

アンジェラの遺書～それぞれの 空と君の間

シャイロックは関西国際空港から東大阪市の堀木製作所へ向かうタクシーの中だった。

ランプを降りてしばらく行くと街並みは一変する。

子供が寒空の下で元気良く遊んでいる。あれは確か正月に日本の子供が遊ぶおもちゃだ。モーターで飛行機を飛ばすのではなく、その日吹いた風に、竹の骨組みに綺麗な日本製の紙を張った飛行物体を空の中に解き放つ。確か凧揚げと言ったっけな。不思議なおもちゃだ。まるで船から海底に錨を降ろすように、日本人は凧という錨を不確かな大空に放つ。ラジコンのように空を支配しようとするのではない。自分の今持っている浮力と、その時の風とに相談しながら、目の前に現れてくる風景の中に自然に身を任せる。日本人以外には、いや、少なくとも特に私には苦手な遊びだ。シャイロックはぼんやりとそんなことを思った。

タクシーを降りると寒風がシャイロックの襟元に吹き込んだ。おもわずコートの襟を立ててコートのポケットに両手を突っ込む。

年の瀬も押し迫っているが、この街にはウォール街のあの空疎な慌ただしさしない。機械油の匂いと工場で旋盤やプレス機を操作する音がこの街の静かな生命力を感じさせる。雑然とした下町に確かな生活の断片が漂っていた。

「シャイロックさん」

「ああ、堀木くん。ユキコさんも一緒だね」

堀木とユキコは街並みのブロックの角を曲がってこちらに歩いてくるシャイロックを見つけると大きな声で手を振った。

「わざわざすみません。アメリカから」

「いやなに、構わんよ。こうなることがわかっていればいったん帰国したりなどせずに、一度堀木製作所に足を運んでおくべきだったと思ってるよ」

堀木は重ねて申し訳なさそうに頭を下げた。

「何度も言うたけど、それは無理ですわ。従業員と油にまみれた工場とこの東大阪の空気。それが全部で堀木製作所やからな。儲かる部分だけ切り離してあとはゴミ箱に捨てるようにリストラだなんてことは最先端の経営学だかなんだか知らんがそんなことようできませんわ。アメリカからわざわざこの件で来ていただいたと聞いてますけどお引き取り願いますか」

堀木製作所社長は初対面の挨拶もそこそこにシャイロックにいきなりこう切り出した。

「おっしゃることは考え方としてわからなくもありませんが、今ご子息がどういう状況に置かれているかをご存知ですか」

シャイロックはいきなりのこの非礼な対応にも冷静に反応した。

「自分で撒いた種や」

「ご子息はあなたのためにもよかれと思ってされたことですよ」

堀木の父親は露骨に嫌な顔をした。

「やり方が気に食わんのや。ほな言わせてもらいましょか。会社の効率をよくしてもっと利益が出せるようにする、これは当たり前のことですわ。しかしな、あんたらは儲からんものは人でもモノでも切り捨ててしまって涼しい顔しとる。そんなんしてまで会社の時価総額上げてどないしますの？あんたは本場のアメリカさんの金融マンやったそうやからわかってると思うけど、時価総額なんてもんは、あんたあれ本来会社を清算するとき破産管財人が残った会社の財産を債務者たちで分け合うために計算するもんでっせ、元々は。それをポツと出のわけわからんインターネットベンチャーのアホどもがはやり言葉のようにしてもうたけど、あほとしかいいようがないわ。」

堀木は父親の口から時価総額などという言葉が出てきたのに驚いた。そんな言葉を知っているとは思ってもみなかったからだ。

シャイロックはさらに驚いたようで、シャイロックの驚きは堀木と違って、堀木の父親のその時価総額という言葉の正確な理解だった。

「なるほど、確かに「時価総額」というのは、今懸命に生きようとしている肉親を前にして、死んだあとの財産の計算を始めるのと同じです。まあ確かにそういうニュアンスを知らずにその言葉を使って得意顔の日本人ベンチー起業家はまあ我々の間では、少々甘く見られているというか失笑を買っているというところがありますな。もともと米国の株価至上主義者が多少の露悪的なニュアンスを含んで使っていた言葉ではあります」

堀木製作所社長はその言葉を聞き流しさらに言葉を続けた。

「リストラっていう言葉も気楽に使わんで欲しいわ。俺たちまっとうな経営者が仲間の従業員の雇用を守るためにどれだけ血みどろの苦勞をしているか。」

「それはわかりますが一般論ですな。あなたの会社の場合、あなたの経営戦略ではあなたの素晴らしい特許は完全に宝の持ち腐れというものです。私がプロデュースすれば、無振動シェーバーどころかあの特許が潜在価値として秘めている宇宙産業への転用だってできるのです」

「大きなお世話や、そんなもんは。そのために堀木製作所や亜細亜電算をリストラして解体だと？ふざけるな。株式投資に有限責任はあっても自分の子供に対する責任に有限責任なんてないんだよ。従業員は自分の子供とおんなじや。子供に対する責任はすべて無限責任なんだよ。あんたは子供がいないからわからんだろう。子供がくれたからといってリストラできるか？あんたは一体誰のために働いとるんや。あんたはいったい誰を守っとるんや。聞けばあんた自分の子供をどもを自分の不甲斐なさで死なせたそうやな」

空気が完全に凍りつく。

「おやじ、なんぼなんでもそこまで調子に乗るのはやめてくれへんか」

堀木がこわばった表情で凍った空気にアイスピックをたてた。

「親父かてさんざん家族に迷惑かけておいてその言い草はないやろ。従業員守っても家族は守られへんかったやろが。おふくろと弟たちのこと棚にあげて何かッコつけてんねん」

「堀木くんやめようよ、今そんな話してもしょうがないよ」

ユキコが悲鳴のように割って入る。

「いや、いいんだ。アンジェラだって一番肝心な時に破産するような間抜けな父親じゃなければ14歳で命を落とすことだってなかったのさ」

シャイロックが寂しそうにそう言った。

堀木の父親もさすがに言い過ぎたと思ったのか、バツの悪そうな顔をしてそっぽを向いてしまった。

堀木製作所の応接室はこの上なく重たい空気に覆われて、中にいる人間はそれぞれ窒息寸前だった。

完全に手詰まりだ。

このまま話は決裂したまま夕方の記者会見の時刻を迎えてしまうのだろうか・・・

「ここにお嬢さんの、アンジェラさんの遺書があります」

その時ユキコがカバンの中からスヌーピーのイラストのついた古い封筒を取り出した。

「何だと？なぜそんなものを君が持ってるのだ」

「あなたの古い知り合いの一人、ジュイスマール・スウィットナーさんから頂いてきました」

「やっぱりあいつが持ってやがったのか」

「ジュイスマール・スウィットナーさんのことはお忘れではなかったんですね」

「ああ、忘れるものか。私が先物市場で失敗した時の債権者だ。強引極まりないやつでね。ア

ンジェラも死んでしまって一人残されて再起をかけている時にある日家に帰ってみると家財道具一切がなかった。あいつが裁判所の差し押さえの前にその筋の者を雇って私の家じゅうの金目のものを持ち去ったんだ。私が仕事で再起を果たしたら開けてくれということで未開封だった、死期の迫ったアンジェラの遺言状も金庫ごと運ばれてしまったというわけさ。あいつはそんなものは知らないと言い張っていたが」

ユキコは頷いた。

「あなたのことを親会社の新聞社のニューヨーク支局で調べてもらったんです。今回のこの事件は日本の中小企業の特許戦略を変えていくかもしれない事件なので、私が記者をやっている雑誌で特集を組む予定です。その取材の一環としてニューヨークであなたのネタを拾っているうちにジュイスマール・スウィットナーさんの名前が出たんです。たまたま彼に取材した経験のした記者がいたのでこんな資料に行き当たりました。」

シャイロックは微かに震える手でユキコから遺言状を受け取った。

「未開封です。私もどんなことが書かれているのかは知りません。でもきっとあなたに必要なことが書いてあると思うんです。シャイロックさんとはまだ短いおつきあいですけど、私も堀木くんもあなたが時々見せる狂気が入り混じったようなあなたの非情さは本当のあなたじゃないと思っているんです。」

堀木が頷きながら言葉を次ぐ。

「あなたはお嬢さんの運命を変えられなかった自分、高額の手術を受けさせてやる気ができなかった自分を、自分でも気がつかないほどに罰し続けているんだと思います。ご自分ではわからなくても、僕たちを仲間と認めてくれたあなたが時折見せる闇、あなたの何とも言えない深い人間的な魅力の影の部分があなたを誰も止ることのできない悪魔の空売り王にしてしまう。」

再びユキコが言葉を引き継ぐ。

「きっと今のシャイロックさんに必要なことが書いてあると思うんです。そして私たち全員にも。ここにいる私たち全員が、今の自分とそうありたい自分の間で引き裂かれそうになってます。理想と現実の間で引き裂かれようとしています。シャイロックさんはそれをお金で埋め行く事を私と堀木くんに勧めました。」

シャイロックは静かに頷いた。

「空、そうありたいと手を伸ばす未来を強引に支配するんだとあなたは教えてくれました。そして将来の富を今この手に強引に引き摺り下ろすことでそれが具体的に可能になると。でもそれは、アンジェラさんを救えなかった自分が許せなかったあなたが作り出した、もしかするとアンジェラさんも望んでいなかった方法なんじゃないんでしょうか」

シャイロックはかすかに笑って封書に目を落とし、そっと指でそれを開封した。

パパ。久しぶりだね。

これを読んでいるということは、
パパはまた昔のパパみたいに大きなお金を動かす
自信満々のパパに戻っているんだと思います。

体には気をつけてね。

最近よく夢を見るの。

もうすぐ死んじゃうのに夢を見るなんておかしいでしょ。

それはね、夢から醒めた夢なんだ。

楽しい夢。

でもね

すぐに醒めちゃうんだ

ああ、夢だったんだってがっかりするんだ

でもまたすぐに楽しい夢が始まる。

あたしは悲しかったことを忘れてまたそれに夢中になるの

でも・・・

またそれがすぐに夢だって分かっちゃう

そしてだんだん、夢が始める瞬間に、
あ、これはどうせ夢なんだって思っちゃうの

そしてどの夢も全然楽しくなくなっちゃって、退屈な夢だけが永遠に続くの

醒めない夢

覚めても覚めても醒めないトンネルみたいな夢なんだ。

あたしは大好きなパパがどんなお仕事をしているのかとても知りたかった。

大人にならないとわからないとってもむずかしいお仕事みたい。

でもアンジェラは少し想像してみました。

パパのお仕事は、夢の中にあるのだと思いました。
そして次から次へ人に夢を見させ続けるお仕事。

株式というパパの商売道具は未来の幸せのための切符だって、
いつかパパはそう言ってたよね。

すばらしいお仕事だと思います。

今ない夢の世界に連れていってくれる切符を売る仕事

でもさ、パパのお仕事はそこまでで、
その夢を具体的に完成させることは他の人がやるんだよね。

だからパパ、怒らないでね。

パパのお仕事はきっと次々と醒めない夢を見るのと似てると思う。

夢が終わりそうになると、また次の夢をパパが用意する。

でも、パパは永遠に夢の中にいても、
その夢を本当に生きることはないんじゃないかな。

時々夢から醒めてパパがその切符を持って列車に乗ってってみてください。

今生きている人生を楽しんでみてください。

パパがお仕事がうまく行かなくて、
アンジェラと一緒にいてくれた時のパパは、
あたしがそれまで知っていたパパとは全然違ってたよ。

それまでのパパはとってもかっこ良かったけど
どこか現実の世界にはいないみたいだった。

生意気言ってごめんなさい。

それと・・・

パパは自分がお仕事がうまく行かなかったから
ママと離婚することになったと思ってたみたいだけど、
それは違うんだよ。

ママは醒めない夢を見続けるようになって
どんどんどんどんお金持ちになっていったパパについていけなくなったんだよ。

これはママにから直接聞いた話だから間違いはないよ。

ないしょなんだけどね

でももう、あたしもこの世にはいない。

あたしからママにいつか謝っておくね。

さよなら

大好きなパパ

アンジェラより

「金融ビジネスは醒めない夢か」

しばらくたってからシャイロックが深いため息と共に言葉を発した。

「夜夢みることができないから昼間夢を見るんだ」

ユキコという言葉に、堀木、堀木の父親、シャイロックが反応する。

「堀木くんのお父さんの言葉です。」

来る日も来る日も旋盤やフライス盤を触って、夜は疲れてぐっすり眠って夢を見る暇もない。でも昼間自分自身のその手触りの中で新しい技術を仲間たちと作っていく。とても地味でシャイロックさんのお仕事のような派手な夢はないかもしれません。そして仮に宇宙ロケットという

夢があったとしてもその根幹技術を作った当の堀木製作所の社長はロケットの夢よりも旋盤の手触りや機械油の確かさを優先すると言っています。

ユキコは深呼吸をしてシャイロックと堀木製作所社長を見た。

でもお二人の夢って本当に別の夢なんですか。」

シャイロックと堀木製作所社長は顔を見合わせる。先ほどまでとは違ってなにかお互い接点を探ろうとしている眼だ。

「まだ時間がある。一番最良の方法を探してみませんか。私もどうやら強引すぎたようです。」

シャイロックが堀木製作所社長に語りかける。

堀木の父親は渋々、しかししっかりとシャイロックの目を見て頷いた。

「私もちょっと言い過ぎました。私も従業員もロケットの夢がこのまま日の目を見ることなく野ざらしになっているのは嫌だったし、いつかは日々の現実だけが永遠に続くだけではない仕事をしたかった」

堀木とユキコは頷きあった。

同日夕方東大阪市商工会議所内プレスルーム記者発表

堀木製作所はこれまで通り松上電器産業に製品を供給し、特許の売却を含む特許の独自活用戦略を破棄。

同時にシャイロックはインターネットベンチャー企業ソーシャルスマッシュに対する20億1600万円のデッドエクイティスワップを実施。会社の借金を株式に振り替えることでソーシャルスマッシュはシャイロックの100%支配下となった。

堀木はソーシャルスマッシュのオーナーの座から降りることとなったが、引き続き代表取締役として職務を果たす。

堀木個人に対する債務は株式に転換されて消滅したのだった。

ソーシャルスマッシュの定款が再度書き換えられた。

登記所で閲覧すると、東大阪にあるソーシャルスマッシュ株式会社定款にはこう記されている。

「宇宙開発事業における技術開発及び次世代への職人の基盤技術継承、および開かれた特許戦略コンサルティング」

堀木製作所はこれまで通り無振動シェーバーを供給し、シャイロックの20億の資本で技術ベンチャー企業ソーシャルスマッシュ株式会社が堀木の父の特許をベースにした宇宙開発事業を行うこととなったのだった。

【追記】

それから半年後、ビジネス書で久々のミリオンセラーが書店の平積みになっていた。

岸田由紀子 著『東大阪からロケットを飛ばす。～下町の技術屋とニューヨークの金融屋のコラボ』

表紙のソーシャルスマッシュ代表取締役堀木武雄のすこしはにかんだ笑顔が印象的な本だった

。

シャイロックのいた風景 完